

「ツキノワグマとナラ枯れ」

この記事を書いている11月は、全国的にツキノワグマ（以下「クマ」という）の出没についてよく報道されます。クマは、エサのなくなる冬季に向けて体に養分を蓄えるために、採食行動が活発になります。これにより行動範囲が広がり、人との遭遇や市街地への侵入が目立つこととなります。

この秋は例年になくクマの出没が多く、過去最高値を更新しているとの報道を目にしました。この要因は、越冬のためのクマの採食行動の活発化に加えて「ナラ枯れ病」の拡大が重なったためと考えます。

クマは、秋にドングリ類を採食して、体に脂肪を蓄えて越冬の準備をします。しかし、山の中にあるドングリをつける樹木の枯損が広がり、エサを探してさらに行動範囲が広範囲になり、その結果として市街地への侵入が増えていると考えます。特に、ニュースで報じられている、秋田県や新潟県でのクマの人身被害や出没状況とナラ枯れ被害の拡大域が、偶然とは思えないほどピッタリと重なります。

あきる野市を含む西多摩地域でも、昨年からナラ枯れが目立つようになり、今年は更に被害が拡大しています。ナラ枯れ病は、カシノナガキクイムシを代表とする体長2mmに満たない小さなキクイムシ類が原因で発生します。このキクイムシは、コナラやミズナラ、カシ類などドングリをつけるブナ科の樹木を狙い、1本の木に集中加害（マスアタック）をします。それにより空いた、細かい^{きり}錐で空けたような穴から樹木内に潜り込み、雌雄のペアで子育てをします。この時に腐朽菌（ナラ菌）を持ち込み、繁殖させて幼虫のエサにします。この腐朽菌によって樹木の導管が障がいを受けて水不足になり、木が枯れてしまいます。不思議なことに、マスアタックを受けたコナラでも枯れないものがある一方で、軽微なマスアタックでも枯れてしまうものもあります。生き残った木も枝の一部が枯れるなど、ドングリの結実には影響があるようです。

初夏になると1つの穴から15匹ほどのキクイムシが羽化し、過去にキクイムシの被害に遭ったことのある木を避けて、新しい木にアタックします。中古の家より新築の家を好むような感じです。そのため、ナラ枯れ被害がさらに広がっていきます。

数ミリの小さな虫により、大きなクマの行動にも影響を与えているのではないかと考えています。これは、クマだけではなく、ドングリ類に依存している小動物や樹液に集まる昆虫など様々な生き物に影響を与えることが予想されます。

(杉野)

